

富岡美子作 「再 会」

(効果音) (部屋のドアをたたく音)
吉野直美 お兄ちゃん、お兄ちゃん、朝よ！
(効果音) (ドアの開く音)
吉野健一 なんだよ、朝っぱらから。うるせえな。
直美 何よ、人が親切に起こしに来てやったのに。今日は入学式でしょ。遅れて恥をかいたって知らないから。
健一 余計なお世話！ 入学式は午後からなんだ。早くあっちへ行ってくれよ！
直美 (ふてくされて)あ、そう。
(効果音) (ドアの閉まる音)
健一 (モノローグ)人がせっかいいい気持ちで寝てたのに。あーあ、目が覚めちゃったよ。今日は入学式か。おれには関係ない。おれが好きで行く学校じゃないんだ。おれはこの4月から高嶺高校へ行くはずだったんだ。それなのに、チクショー！
ナレーション 朝から穏やかならぬのは、吉野健一。青春高校1年生。第1志望校に失敗してからというもの、健一は半ば投げやりな生活をしていました。
健一 (モノローグ)おれは高嶺高校へ入るために、あらゆるものを犠牲にして勉強してきたんだ。あんな学校へ行くためじゃなかった。しかし健一、過ぎたことをいつまで考えていても仕方ないぞ。これから3年間は、適当に過ごせばいいんだ。
(効果音) (ドアの開く音)
直美 お兄ちゃん、忘れてた。
健一 なんだ、またお前か。ノックもしないで入ってくるな。
直美 したわよ！ どうして朝からそんなに怒ってるのよ。あたし、ケンカしに来たんじゃないの。この手紙渡すの、忘れてたの。
健一 手紙？
直美 教会学校の佐藤先生から預かってきたの。お兄ちゃんも晴れて高校生になったわけだし、また教会へ来てみない？
健一 とてもじゃないけど、そんな気分になれないね。
直美 暗いなあ、お兄ちゃんは。
健一 お前には関係ない。用が済んだらさっさと出ていってくれよ。
ナレーション 健一は、小学校5年の時、友達に誘われて妹の直美と共に、教会学校へ行くようになりました。しかし中学に入ってから、クラブ活動や塾のためにだんだんと教会学校から離れてしまったのでした。

健一 (モノローグ) 佐藤先生か。すっかりごぶさただな。だけどおれに手紙ってなんだろう。

(効果音) (封筒を開けて読む。途中から佐藤先生の声)「高校入学おめでとう。いよいよ高校生ですね。高校生になって、ますます勉強のほうも忙しくなるといいますが、また教会へ来てみませんか？ 来週の日曜日の午後には、高校生会があります。特に、新入生歓迎会を計画しています。吉野君も久しぶりに顔を見せてください。お待ちしております。」

高校入学、何がめでたいもんかよ。教会か。悪いけど、もう縁がないな。おれは、“日曜日は遊ぶ日”と決めたんだ。これからは自分の好きなことをして、思う存分楽しむんだ。早速来週の日曜日は、久しぶりに圭子と一緒に映画でも見に行くかな。

健一の母 (オフ) 健一、健一、電話よ。藤川圭子さんから。

健一 (モノローグ) え、圭子から？ グッドタイミング。(母に) 分かった、今すぐ行く！ (電話に出る) もしも圭子？ 今電話しようと思っていたところなんだ。

藤川圭子 (フィルター音) あ、そう。何？

健一 久しぶりに映画でも見に行かないか？ 来週の日曜日に。

圭子 (フィルター音) 来週？ うーん、来週はちょっと用事があるんだ。

健一 なーんだ。つまんねえの。ところで圭子、なんで電話かけてきたの？

圭子 (フィルター音) 別になんでもないんだけど、意外と元気そうね。安心した。

健一 え？

圭子 (フィルター音) 直美ちゃんが、「お兄ちゃん、元気ないから励ましてあげて」って言うから、どんなにしよげ返っているかと思って。

健一 直美のやつ、余計なことして。

圭子 (フィルター音) お兄さん思いで、かわいいじゃない。それじゃ。

健一 (慌てて) 圭子、来週がダメだったら、その次は？

圭子 (フィルター音) うーん、ごめん。ここんとこずっとダメなの。それじゃ、あたし、これから学校へ行かなくちゃいけないから。さようなら。

(効果音) (電話の切れる音)

健一 (モノローグ) ちえ、切れちゃったよ。

母 健一、あなたも早く支度して学校へ行きなさい。

直美 (冷やかして) お兄ちゃん、フラれたんでしょ。

母 直美、お兄ちゃんをからかうのはやめなさい。

直美 はいはい。(モノローグ) これでもお兄ちゃんのこと、心配してんのよ。

ナレーション 次の日曜日――。

直美 (ふざけて) お兄様、お出かけですか？

健一 ……

直美 お兄ちゃんてば。なんか言ってよ。今日の午後、教会へ来るでしょ？

健一 そんなとこ、行くかよ！ おれは教会へ行くほど弱くない。おれは自分の好きな道を一人で生きていくんだ。ちょっと出かけてくる。

直美 どこ行くの？

健一 お前には関係ないよ。

(効果音) (戸の閉まる音)

健一 (モノローグ)さて、これからどこへ行くかな。あー、いい天気だ。草木は新緑の芽を出し、花はきれいに咲いて、鳥はさえずり…、外は春だっていうのに、おれの心は冬のまんまだ。

学校の先生 (回想エコー)君たちは選ばれてこの学校へ来たわけだ。これからの3年間は貴重な時間だ。十分勉強して、スポーツに親しみ、頑張るように。

健一 (モノローグ)「選ばれて」だって？ ちえ、あんな学校へ行っても詰まんないし、家にいてもイライラする。日曜日は思い切り遊ぼうと決めたけど、一人でこうしてブラブラしても、ちっとも面白くない。圭子のやつ、一体なんの用事があるんだ？「高校へ入ったら、いつでも付き合う」って言ってたくせに。チクショー！（間）あれ、あそこに歩いてんの、圭子じゃないか。隣に歩いてるのは、一体どこのだれだ？ あれ、どっかで見たことあるな。…あ、あいつ、確か隣のクラスだった安西だ。

圭子 あら、吉野君じゃない。一人でこんなところで何してるの？ あ、そうか、これから映画見に行くんだっけ。

健一 ちょっと来いよ、圭子。(圭子の腕をつかんで引っ張っていく。)

圭子 痛いな。何するのよ。

健一 用事って、こういうことだったのか。いつから付き合ってたよ、あいつと。

圭子 今年からよ。

健一 どうしてだよ。いつでもおれと付き合うって言ったのはウソだったのか？

圭子 ウソじゃなかったわよ、あの時は。でもね、吉野君、ちょっと勝手だわよ。

健一 勝手？

圭子 そう、自分勝手よ！ あたしは吉野君の人形じゃないわ。吉野君は中3になってから、受験勉強で忙しいとかなんとか言って、ほとんど会ってくれなかった。あたしが悩んでいる時、ちっとも助けてくれなかったじゃない。あんなに一生懸命勉強したのに、結局高嶺高校に入れなくて、残念だったわね。

健一 圭子、お前…。

圭子 それじゃね、吉野君。(オフ)さよなら。

ナレーション 圭子を信じ、心の支えにしていた健一にとって、彼女の言葉は大きなショックを与えました。

健一 (モノローグ)圭子があんなふうにしてたとは知らなかった。チクショー！ あ

んなに一生懸命勉強した結果がこれか。高嶺校には落ちる、圭子にはフラれる。一体おれは、これからどうしたらいいんだ?!(多重エコー)

ナレーション 健一は、当てもなく、ただぼう然と歩き続けました。

佐藤先生 吉野君、吉野君じゃない!

健一 あ、先生…。

ナレーション それは、教会学校の佐藤先生でした。

佐藤先生 久しぶりね。元気? 高校生活はどう?

健一 ええ。まあ…。

佐藤先生 これから教会の高校生会へ行くんでしょ。あたし、今、そのためのお菓子を買いに行った帰りなの。ちょっとこれ持って行ってくれない?

健一 あのー、おれ…。

佐藤先生 どうしたのよ、一体? こんないい天気の日、サエない顔しちゃって。美男子が台なしよ。

健一 先生。おれ、これからどうしたらいいんですか?

佐藤先生 あらら、どうしちゃったの? 何やら深刻そうな雰囲気ね。でもちゃんと最初から話してくれないと分からないわよ。

ナレーション 久しぶりに会った佐藤先生でしたが、その温かい目を見ているうちに、健一は何もかも話してみたい気持ちになったのでした。

佐藤先生 …ふーん、直美ちゃんから少し話は聞いてて、祈っていたけど…。でも、いい勉強になったじゃない?

健一 勉強? おれは一生懸命勉強したお陰で、今、心が空っぽになってしまったんです。

佐藤先生 “人生の勉強”よ、吉野君。受験に失敗し、失恋して、ダブルパンチを受けた。その結果、何をしてもつまらない。何もする気にならない。何をしても満たされない、っていうわけね。

健一 ええ。

佐藤先生 でも、今、吉野君が言った“心が空っぽ”っていうの、いい言葉だと思うな。

健一 え?

佐藤先生 言葉がいいって言うより、そういう、心が空っぽの状態って、いいと思うの。

健一 よくないですよ、ちっとも。もうズタズタです。

佐藤先生 うん、それは分かるわよ。でもさ、ほら、コップが空っぽだと、水をいっぱい注ぐことができるじゃない? 満たせるじゃない。吉野君は、あんなに全力を尽くして勉強したのに、高嶺には入れなかった。それで、“おれは大丈夫”っていう自信が崩れちゃって、どっかへ行っちゃった。そこへ女友達、藤川さんて言ったっけ、にもひじ鉄食って。“あの子だけはおれのもの”っていう最後の望みの綱も切れちゃって、もう“心の自信倉庫”がほんとに空っぽ。

健一 自信、倉庫ですか…。

佐藤先生 あのね、吉野君。先生の経験から言って、心の中の自信過剰って、一番厄介だと思うの。“おれは大丈夫、おれは一番”って思いでいっぱいになってるから、本当に見なきゃならないものが見えないのね。ほかの人の心とか、自分のおかれている状況とか、これからの道とか——。

健一 先生もそうだったんですか？

佐藤先生 そうよ。10年前のわたしって、吉野君とそっくりだったわよ。自信持つのはいいことだけど、それはしばしば自己中心のいエゴイズムになるのね。それがめちゃくちゃになって、もうそれこそ心ん中スッカラカンになって死ぬことばかり考えてた時、教会に誘われて、イエス様に出会った。「わたしのもとに来なさい。あなたを休ませてあげよう」っていうキリストの言葉が、スッと入ってきて、本当にしがみ付くようにして信じたのよ。あれがわたしの転機ね。

健一 “出会い”か…。

ナレーション 健一は、まるで独り言のように話す佐藤先生の横顔を、何か懐かしいものを見るかのように見つめました。そして心の中で、「キリスト。イエス様」とつぶやいてみたのです。

<完>